



西トップ寺院の現状

西トップ寺院は2008年度5月に正面の破風石材が一部落下した。アブサラと善後策を協議の結果、足場を構築し不安定な中央塔を支えることになり、2008年12月に足場の架設を行った。足場をかけることによって中央棟西側の不安定な石材を支えることができ、かつ上部の石組の調査が可能となった。2009年2月には保存科学班が高所作業車を用いた調査を行った。

本文18頁参照（撮影：石村 智）



平城宮跡第一次大極殿正殿扁額

第一次大極殿正殿の扁額復原にあたっては、大極殿の格に相応しい扁額の形式を、遺例の網羅的収集により新たに考証した。その結果、扁額とは、文字の記された額面板を額縁により固めた上で、建物に固定する一つの構造体とみなすことができ、その形状は建物の構造形式と対応関係を持つことが明らかとなった。額字は、「長屋王願経」より集字した「大極殿」の三字を鎬付き葉研彫で刻んでいる。

本文4頁参照（撮影：杉本和樹）



京都府近代和風建築総合調査 (旧竹内栖鳳邸霞中庵)

京都府に残る明治から昭和初期に建てられた和風建築は、近世以来の造形・技術を正統に受け継ぎつつそれを究極的に洗練させたものと、あるいは近世的技術を元に古代・中世の比例と細部を復古的に用いるものとで代表される。霞中庵は、部分は正統的ながら、意図的な軸線の振れを巧みに空間に昇華した、施主竹内栖鳳の創造力が飛翔した優れた造形を持つ。 本文 8 頁参照 (撮影: 杉本和樹)



四万十川流域の景観調査

四万十川の中下流は、流域で生産される林産物を河口の下田港まで一気に運びだす川のハイウェイだった。戦後、陸上交通の著しい発達にともない水運は衰退、森林軌道は車道へ、渡し舟や木橋はトラックが通れる沈下橋へと姿を変えた。四万十川と黒尊川との合流点に位置する口屋内地区では、生業の在り方を変えた沈下橋を利用しつつ、林業が継続して行われている。

本文 14 頁参照 (撮影: 恵谷浩子)



藤原宮朝堂院の調査（飛鳥藤原第 153 次調査）

朝堂院中央広場の朝庭は、全面に礫を敷き詰めて整地してあった。下層遺構の調査に先だち、礫敷を一部除去した状況。東西に並ぶ幢竿支柱や北側の柱穴群、および東西、南北に走る石詰暗渠がよく見える。南から。

本文 50 頁参照（撮影：井上直夫）



幢竿支柱 SX10771 東西断面

1 個の横長の柱掘方に柱を 2 本東西に立て並べ、抜き取っている。抜取穴にやや大ぶりの石を捨て込んでいる状況がよくわかる。このような形式の幢竿支柱は初めての検出であり、新羅との関係が注目される。南から。

本文 50 頁参照（撮影：井上直夫）

運河 SD1901A と斜行溝 SD10801A・B

朝庭の下層には、藤原宮を造営した際に資材を運んだ運河が南北に貫流する。藤原宮期の遺構の少ない部分で、整地土を掘り下げて運河を調査した。運河からは、斜行溝 SD10801A・B が東北方に分流するという新たな事実が判明した。上方は大極殿、その遠方は耳成山。南から。

本文 50 頁参照（撮影：井上直夫）



高松塚古墳の調査（飛鳥藤原第 154 次調査）

石室解体に引き続き、墳丘の仮整備に伴う調査を実施した。石室の東西に 2 条の石詰暗渠を検出するとともに、旧地形や古墳の築造工程に関する重要な所見を得ることができた。今後は機械室を撤去し、補足調査を経て、築造当時の古墳の姿がよみがえることとなる。南西から。

本文 94 頁参照（撮影：井上直夫）



甘樫丘東麓遺跡の調査（飛鳥藤原第 151 次調査）

7 世紀前半の石垣の西側、谷地形の奥部を調査し、ここにも同時期の遺構が展開することが明らかとなった。その後、7 世紀を通じて活発な土地利用がなされていることも確認でき、遺跡の全容解明に向けて重要な成果が上がった。西から。

本文 68 頁参照（撮影：井上直夫）



石神遺跡の調査（飛鳥藤原第 156 次調査）

昨年度に引き続き、遺跡東限の様相を解明するための調査を実施した。昨年度の成果とほぼ同じ位置で A 期の東限の堀を検出し、遺跡の範囲を確定することができた。東側には通路状の施設があり、堀には門が開くと考えられる。また、7 世紀から 8 世紀初めにかけての 8 時期にわたる継続的な土地利用が判明するなど、石神遺跡の内容と性格を解明する上で多くの成果が上がった。北から。

本文 76 頁参照（撮影：井上直夫）



雨落溝 SD4345

凸字形に曲がる溝で、周囲に小礫や瓦が密にみとめられ、瓦葺礎石建物の雨落溝と推定される。7 世紀前半のもので、饗宴施設として整備される以前の状況を示す、重要な知見となった。北から。

本文 76 頁参照（撮影：井上直夫）



第一次大極殿院南面築地回廊の調査（平城第 431 次調査）

南面築地回廊における最後の調査。基壇（中央）の上には礎石の根石が残存していたが、南半部は水田造成時に削平を受けていた。基壇の北側（写真左側）が大極殿院広場で、南側（右側）が朝堂院の広場。西から。本文 112 頁参照（撮影：牛嶋 茂）



第一次大極殿院西面築地回廊の調査（平城第 438 次調査）

奈良時代前半の西面区画施設のほか、奈良時代後半の築地回廊の礎石据付穴や、平安時代初期の石組暗渠などを確認した。また、区画内部の礫敷舗装の変遷が明らかになった。東から。本文 112 頁参照（撮影：中村一郎）



第一次大極殿院西面回廊の調査
(平城第 432・436・437 次調査)

これまで未調査の西面築地回廊南半部分をつづけて発掘調査した。大極院創建当初の回廊基壇や雨落溝のほか、改修後の掘立柱塼や内庭部礎敷きなどを検出した。奥が第 432 次調査区、中央が第 436 次調査区、手前は第 437 次調査区。北から。

本文 112 頁参照 (撮影：牛嶋 茂)



第 432 次調査出土の磚仏 (約 2 : 3)
西面築地回廊の基壇を覆う赤褐色混礫層から出土。十二尊連坐磚仏の一部で、山田寺出土のものと同原型品とみられる。平城宮内では初の出土例である。像高は 34mm。

本文 112 頁参照 (撮影：中村一郎)



掘立柱塼 SA13404 の柱根
(平城第 432・436 次調査出土)

第一次大極殿院西面回廊解体後の掘立柱塼 SA13404 の柱穴より出土した。柱の直径は最も太いもので約 48cm である。柱運搬用の栈穴や加工痕跡が残る。

本文 112 頁参照 (撮影：中村一郎)



東方官衙地区の調査（平城第 429・440 次調査）

2007 年度と 2008 年度に調査を実施した。調査区南部で検出した土坑 SK19189 からは木筒や削屑のほか、木製品や木屑などが多量に出土した。土坑の埋土をすべて取り上げ、現在も水洗中である。これらの廃棄物はこの地区の性格を明らかにする上で重要な資料となる。写真上は土坑内の木屑の堆積状況（北西から）・写真下は土坑全景（北東から）
本文 128 頁参照（撮影：中村一郎）



土坑 SK19189 出土の木簡

770 年前後の衛府に関わる木簡群。「東宮」「西宮」など中枢施設名がみえる一方、「四切」という極めて日常的な表現の付札もあり、内容はヴァリエティーに富む。地下水に守られ、遺存状況は極めて良好。削屑の量は膨大で、今後の整理・解読への期待が大きい。

本文 128 頁参照（撮影：中村一郎）